145　横手（よこて）5 号墳

－東伯耆地域型石室の典型例－

所在地

東伯郡三朝町横手字粟谷

立地

三徳川中流域の左岸（南側）から張り出す丘陵の東側裾部に位置する。

時期

古墳時代後期後半か

発見と調査

1976 年（昭和 51）の鳥取県埋蔵文化財センターによる分布調査によって発見され、その後、近藤哲雄によって実測図が作成された（文献 1）。

遺跡の種類

円墳か（横穴式石室）

遺構と遺物

古墳は、規模不明ながら円墳と考えられる。周辺で確認された古墳は 10 基あるが、墳丘が流失して石室が露出し、天井石が落下したものもある中で、5 号墳は保存状態が非常に良好である。

石室は、玄室長 2.6 m、奥壁幅 2.3 m、高さは現状で 3.0 m となる（図 1）。側壁、奥壁ともに最下段に高さ 1.4 m ～ 2.2 m の板石を立て、その上に角礫をやや持ち送り気味に小口積みする。奥壁に向かって右側壁に数ヶ所線刻らしきものが見られるが、壁画と判断できない。

前壁側は、両側壁の内側に立石を設けて両袖をつくり、その上に板状の石材を横架して楣石とする。楣石の上に天井石や奥壁などとほぼ同じサイズの石材を乗せて、前壁としているが、玄室の半分くらいの位置まで深く入り込み、天井部を形成する。

羨道は長さ 1.1 m が残存し、幅 1.4 m を測る。楣石上に前壁として積まれた石がそのまま羨道部の天井となっている。高さは 1.3 m である。

東伯耆における横穴式石室の本格的導入は、倉吉市大宮古墳や同家ノ後ロ 1 号墳に始まると考えられるが、それらは、一部に変容を加えつつも故地である中九州地方の横穴式石室の特徴を継承し、ドーム状の天井を作る。しかし、古墳時代後期後半（6 世紀後半）以降には、板状安山岩を用いて、小口積み部を大幅に減らし、壁面構成を単純化した石室が広く東伯耆一円に分布する。横手 5 号墳の横穴式石室は、そのような地域型として広く普及し始める初期の姿をよく伝えている。

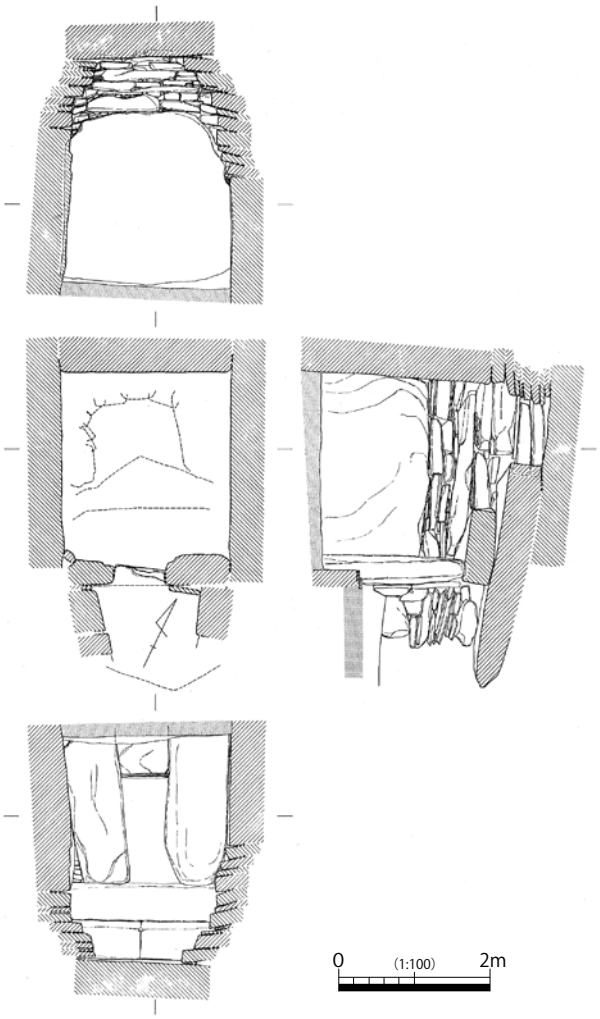

図 1 横手 5 号墳横穴式石室実測図

特徴と意義

非常に保存状態の良い石室であり、東伯耆地域の横穴式石室に共通する諸要素がよく観察できる。比較的容易に見学可能な立地にあり、当地域の横穴式石室研究に欠かせない古墳である。

現状と遺物

石室は現地で保存されている。出土遺物などは知られていない。

文献

1. 近藤哲雄 1987「東伯耆における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』 pp. 39-68

（髙田　健一）